

おとし鷹 上



子母沢寛

徳間文庫



おとこ^{だか}鷹^上

© 1987 Ryūichi Umetani Printed in Japan

607-7

1987年9月15日 初刷

著者 子母沢寛

発行者 荒井修

発行所 株式会社徳間書店
東京都港区新橋四一〇二一〇五

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替東京四一四四三九二番

印刷 製本 凸版印刷株式会社

〈編集担当 前島不二雄〉

ISBN4-19-598358-4 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

おとこ鷹上

子母沢寛



徳間書店

上卷目次

皐月花さつき 7

入江町 16

ひと雨 25

重じゅう瞳どう 35

信用師 44

五両金 54

石ころ 63

稻荷前いなりまえ通り 72

浅草新堀 82

真髓 91

花 99

黄^{こう}塵^{じん}

108

夏野

117

宵
127

吉田町

136

黒い腹

145

青桐の木

154

百日紅^{さるすべり}

163

五ツ目渡^{いっめわた}し

172

切見世

181

花の湯

191

夜行^{やこう}

200

小狸^{こだぬき}

210

冬濃し

219

吹貫横丁ふきぬきよこちよう

228

寒鰯かんがり

237

紅梅

246

糸車

256

若い侍

265

纏とうばん

274

流水りゆうすい

285

糠雨ぬかあめ

294

霧304

浅黄空あさぎぞら

314

夏雲

322

水草の花

331

寄生木やどりぎ

341

水 350

江戸構 359

石榴ざくろの花 368

梢の月 378

赤坂田町 387

白い花 397

粉雪 407

如月きさらぎ 416

里神楽さとかがら 426

土性どしよつ骨ほね 435

春はる鳶とんび 444

思いやつれ 453

蝦夷の人 462

皐さ月つき花き

若葉の狭い庭。

小さな燈籠とうろうの裾すそに皐月花が二株咲いている。昼下りで明るかった。

ずっと国へ帰っていたが、この頃ころまた江戸詰つになった津輕つがるの家来小野兼吉という男は、一刀流の名人中西忠兵衛の弟子で、相当に年期も入り、飛んだ暴れ者だった。同じ本所どころにいながらまだ逢あった事は無かったが、名前だけは知っている。

のっそり入って来たのを見上げて、勝小吉かつこきちは一寸ちよつとびっくりした。相撲取りのような肥ふとった大男で、素足の指がみんな親指のような恰好かつこうで上向きになっている。

「無精者で立たねえが、勘弁して貰もらおう。生憎あいにく女房にようばは子供をつれて用に行き、倅せがれの麟太郎りんたろうは狸穴まみあなまで学問に行つて留守故に、おのしがような大きな人も坐すわつて貰う事が出来るんだが、見る通り猫の額だ、ふだんなら上つては貰えねえ」

「いやあ」

小野は畳が跳ね上るようにどしんと響きを立てて坐った。小吉はにやにやして、

「おのしは、大層な長げえ刀だ。中西先生はいつもきやしゃな好みでいられたがねえ」といった。小野は小吉を見詰めて、

「津輕十萬石で剣を使う者も多いが、これ位の刀をさすのはわたしばかりだ。ふだんこれ位の奴やつを

扱っていなくては、いざという時に物の役には立たんからな」

ふんぞり返るようにして、上向きに白い眼を見せた。

「滅法な腕ときいたが、おのし、強い事だろうねえ」

「実は試合をして貰いにやって来た」

「ほう。それもよからう——が、その前にお刀を拝見させちゃあ呉れめえか」

「いいとも」

小野の、こっちの鼻っ先きへ突き出す刀を受けとって、小吉は無遠慮に抜き放ち、

「相州もんだねえ、先ず二尺九寸だね。はっはっ、結構だ。それじゃ一つ、おいらがさし料も見貰うか」

小吉は小野の刀を鞘へ入れると、立って次の座敷から黒ずくめの袴こしらえをした刀を下げ出て来た。

「ほう」

小野は眼を見張った。

「四谷の貫心流平山行藏先生から頂戴して、ずっと愛用しているものだ。重ね厚で諸事遅たぐましく三尺二寸ある」

小吉は、坐るとすぐさつと抜き放って一閃いつせんすると再びすうーっと息を引き込むように鞘へ納めて見せた。抜刀の術は山田流据物刀流すえものを大成した名人五世山田浅右衛門吉睦から教わってある。

「どうだ、御覧な」

が、小野は受け取らなかった。

縁側から猫が入って来た。

小野が出しぬけに、

「今日はお暇をさせて貰う」

という。額の辺りが妙に脂ぎって、血の気がひいていた。

「試合を言ったのはどうしたのだ。え、おいらがところは手狭だから、女房や倅がけえつて来ると、試合どころの騒ぎじゃあ無くなるんだ。やるんなら、早えところやろう」

「いや、また日を改めて」

「折角勝小吉を打ち込んで本所深川界限で売り出そうというに、このまま別れるも口惜しかろう。よし、女房や倅に試合なんぞは見せたくなし、こっちから出て行ってやろう」

畳み込んで来る言葉つきに、小野はぐっと詰まった。そして暫くして、やっと、

「では恐れ入るが」

といった。

「明日四つには行くよ」

小野はあわてた様子で帰って終った。

小吉は、両手を頭の下に悠々と引っくり返って、

「馬鹿奴、長げえ刀で、おれを脅そうなんて飛んでもねえ野郎だ」

ぷふっと吹き出した。

間もなく女房のお信が娘の五歳になるお順の手をひいて戻って来た。声をきいて小吉はまず良かったというような顔つきをした。

その晩。倅の麟太郎が三、四冊の阿蘭陀本の包みを抱えて帰って来て間もなく、小吉は、お信にだけ目配せして、こっそり屋敷を出て行った。

かねて面倒を見てやっている剣術遣いの東間陳助と平川右金吾の二人がとんだ貧乏をして大横川

の法恩寺橋を渡ったすぐ東の長屋に住んでいるが、平川は胸の病気がまだすっかり良いというでは無いし、だいぶ前に一両やっただけで、ずいぶん長くほったらかして置くから定めし困っているだろうと、急にそれが気になり出して来たからだ。

平川は相変らず瘦せてはいるが思ったより元気で、うす煤ぼけた行燈を引き寄せてこの頃覺えた刀の束巻きの手仕事をやっていた。小吉は、ほろりとした。

「陳助はどうしたえ」

「もう帰りましょう。吉田町の平太が何にかしくじって番屋へしよびかれたと燈芯屋の婆が知らせて来ましてね。もう二時刻ばかり前に出て行きました」

「平太ってのあ、夜鷹の引っ張りをやってる野郎か」

「そうなんです。何にしろ、おかみさんに先き立たれてまだ十三を頭に小さな子供が九人もいる。平太はどうでもいいが子供がみじめなものですからね」

小吉は何度もうなずいた。

ぴしゃぴしゃしゃべり乍ら、橋の方へ行く二、三人の女の足音がしたと思ったら、手荒くがらつと格子が開いて、

「おい、大変だよ」

東間の声である。

しかし陳助は上り端へかけた足をすぐ引つ込めた様子で、

「おいら一とつ走り、入江町へ行って来る。え、平太のさわぎどころじゃあ無くなったよ。世の中には何んてえ野方図の野郎がいるもんだろう。勝の旦那へ押し込もうてえ奴がある」

「え？」

平川は飛び上る程びっくりした。小吉が、

「おいおい陳助」

と笑い乍らよんで、

「勝小吉なら此処にいるよ」

といった。東間は引つ裂くように障子を開けて転がり込んで来た。

「だ、だ、旦那」

「何あんだ、息もきれぎれ、そうしている図はまるで手負がような塩梅だ、早くも何処かやられて来たか。はっはっ、疵あ浅え、しつかりしろえ」

「冗談なんぞいつてらっしゃる場合じゃありませんよ。え、津軽屋敷の小野兼吉、あの野郎、喧嘩だといって押上の大雲寺へ人数を四、五十も集めていやがる、きいて見るとあの馬鹿奴、旦那がところへ押し込んで行くという」

「今日おれがところへ試合をするとか何んとかいって長げえ刀で大威張でやって来たが、けえり具合が妙だった。今頃来られてはおれが困る。屋敷には、お信もいるし、麟太郎やお順もいるよ」

小吉は舌打ちをして、

「よし、右金吾、お前、手紙を一本書け」

「は」

「勝の小吉はここにいる。入江町よりは近くもあるし、早えところこっちへ来い。それとも都合じやあおれが出向いてやってもいい。陳助はそれをもって返事をとって来い」

平川はちびた筆を噛んで粗末な紙へすぐ言う通りの手紙を書いて、陳助が持ってあわてて出て行った。

「さあて。四畳半に二畳、便所は外へ行くこのお屋敷へ四、五十人の人間に暴れ込んで来られては、とんと足掻がつかねえな」

小吉はそんなことを言いながら、たった今、巻きつけた平川の刀の束を手にとって、珍らしそうにひねくり廻し、握って見て、

「滅法うめえじゃねえか」

平川は喉をしゃっくりするように小さく鳴らしただけで言葉が出ない。

刻ノ鐘が聞えた。五つだ。窓の障子を開けたら若葉の匂いがすうーっと音を立てるように流れ込んで来た。

間もなく息を切って陳助が帰って来た。

「すぐ行くというだけで、別に返事はよこさなかった。寺の坊主を脅かしたらしく、焚き出しをさせ、酒を飲んでる奴がありました」

「大仰な野郎共だね」

だんだん更けて来る。

小吉はねころがって待っているが、すぐ行くといったのに小野は出て来ない。退屈になって、平川のやりかけの束をとって、組紐を巻き出した。

「おい、この鮫の目を、うまく出すのはなかなか出来ねえな。どうすれあいんだ」

平川は、小さな眼をしょぼしょぼさせながら、

「それがむずかしいのですが、旦那——野郎ら、来ませんなあ」

「夜が明けてから来る気かねえ。何んぼ江戸のはずれでも、夜更けて斬合なんざあ、人様に御迷惑だと思っただろう。それならそれでおれは入江町へけえって寝て来るから陳助、その辺まで行っ

「見てくれろ」

陳助が出て行こうとした出合頭であいがしらに、

「御免下さい」

格子の外にごつごつしたのが五人、さっと寄って来た。

「どなただ」

陳助はぎょっとした。

「勝先生にお目にかかりたいのです」

「よし」

すぐ小吉が返事をした。そして、左手に行燈をぶらりと下げて、のっそりと出て行った。

「おお、おのし、小林隼太はやたじゃあねえか。はっはっ。肩衣かたぎぬなんぞ着おって、大そう立派でやって来たが、やっぱりおのしが小野兼吉の後押あとおしか」

「実は年来の友人でありましてな」

「そうだろうの。たった四十俵の隠居だがこれでも、天下御直参じきさんの端はしつくれた。多寡たかが津輕の田舎ッペえが喧嘩けんかを売るには覚悟がいる。割下水わりげすいの忠也ちゅうや派は一刀流いっとうりゅう近藤弥之助こんどうやのすけ先生がところの内弟子小林隼太は本所随一ほんどころの暴れ者と知られた男だ。その尻押しりおしなら出来るだろう。さ、小林、やるか」

「まあまあ勝先生」

と小林は手を挙げて、心持ち首を縮め、

「小林は伊達だてに肩衣をつけて来た訳じゃあないんですよ。まことに不足だろうが、こんどの一件はこの小林に扱あつかわせていただく訳には参りませぬか」

「扱あつかう？」

「兼吉に地へ頭をすりつけても詫をさせます。また如何様にも趣意は立てますから御了簡いただきたいのです」

「ほほう、これはまた芝居ががらりと変るかえ」

「今後兼吉奴が、お前様に万に一つ、かれこれ申すような事がございましたら、わたしはきつとあ奴の首を献じます」

小林はふところから、水引をかけた金包みを出して、そっと前へ置いた。

「御機嫌直しに御身内の衆と召し上っていただき度うございます」

「大そう気味が悪るいんだねえ」

小吉はへらへら笑って、

「おいらあね、二ツ目の古道具市の世話を焼き、市日に面さえ持つて行けば、その日に銭の入る事だから、どうせ素姓の良くないそんな銭を貰う迄の事は無いんだ。聞けば大雲寺にだいぶ人数も集めたそうじゃあないか。謹んでお返し申すから、そ奴らへでも一ぺえ飲ましてやれ。その代り、いか、おいらはお前の知っての通り少々うるさい剣術遣いだよ。往来でぱったり逢ってもそ奴の目の動かし方一つで、腹中あ隅から隅まで読めるのだ。もしも小野兼吉がこんど逢った時に、妙な気持でも動かししたら、忽ちぱつと斬ッ払うが、それだけはおのし堅く念を押して置け」と金の包みを押しかえした。

小林は間もなく帰って行く。小吉は、

「何あに、みんなあの野郎の書いた事よ。小野なんぞは総身に智慧の廻り兼ねた木偶だ。あ奴、何んであのまま引つ込むものか、また何にかの手筈できつとやって来るだろうよ」

「でも、あの様子では」

東間と平川が顔を見合わせて、つぶやいたが、小吉はもうけろりとそれを忘れて、

「おい、引っ張りの平太はどうなった」

と訊いた。東間も、はっとおのれに返ったように、

「北割下水の新町の番屋で、定廻りの秋田定助にひどくしめ上げられておりましたが、秋田がどうにも凄い剣幕で、わたし共には取りつく島もありませんでした。少し、ほとぼりをさましてから、また出かけて見ようと思います」といった。

「秋田定助かあ」

「はいそうです」

「だが、引っ張り位で、そんなむごい目に逢う事は無かろうじゃねえか」

「それがですよ、器量のいい若い女を見せびらかして客を引っ張り、実際には片目の五十を過ぎたとながり鼻の婆を当てがった上、抱え主というのがまた法外な悪い奴で客からさんぎに金をしぼり、着ている物まで剥ぎとって追い出したところを、ばったり見廻りと出喰わしたんだそうです。それですから、それがみんな引っ張りの平太にかかって来て終ったんです」

「はっはっ。まあ良かろう。おれが行って何んとかして見る」

「そうですか。そうしていただければ平太も助かります。何にしろ、あの多勢の子供達が、腹をへらして泣いている、夜鷹の女達が稼ぎの中からほんの一文二文、掻き集めてやってるようではありませんが」

「それは他人事。さて、お前ら、ふところはどうか」